

N. 腎・電解質・高血圧

(240-243)

240 席はレノグラムにおける段階状排泄相の臨床的意義について述べたもので、特に慢性甲状腺炎に多いこと、レニン活性が高いこと、などが挙げられたが、質問も多く、今後ひきつづき検討を必要としよう。病態論的に意味があり、かつ診断的価値があるのか、未だ評価の段階ではない。今後が待たれる。

241 席は腎の Transfer Function について論じたもので、腎血管狭窄性高血圧症と腎盂腎炎や水腎症との鑑別ができるという論旨であるが、この両者は従来鑑別不可能とされて来たものであって、新しい話題を投げかけた。果してこの方法が、臨床上有用であるかどうかについては更に事実の積み重ねを必要としよう。

242 席は ^{99m}Tc -DTPA による分腎機能の定量的評価の研究であって、GFR を自動計測させようとするものである。バックグラウンドの補正等にまだ問題は残っているが、適当な方法によって GFR を、オンライン・リアルタイムに測定することは可能であり、そのための基本的なデータの蓄積が、最も必要とされている領域である。

243 席はレノグラム・超音波・CT・シンチグラフィの複合診断による、より正確な腎臓の形態的及び機能的診断についての論文である。腎臓の機能検査としてはいまだ十分なものがなく、特に腎臓内圧の取り扱いに関しては全く手探りの状態であるので、こういった非観血的検査の組合わせによるアプローチは今後益々大切なものとなる。

(平川 顕名)

(244-247)

演題 244 は、大阪医大・石田らによる ^{131}I -hippuran と ^{99m}Tc -DTPA 同時投与でのガンマカメラレノグラフィーの解析である。前者の試薬では慢性腎炎を、後者ではネフローゼ症候群などによる異常をよく捕えうることであった。

演題 245 は、慈大・上田らによる ^{99m}Tc -dl-DMS (ラセミ体) を用いて 320 例の腎シンチグラフィの経験である。従来のメソ体と臨床評価上差異はないとのことで、更に新しい方向に検討され、よりよい試薬の発見を期待する。

演題 246 は、慈大・大石らによる慢性透析例での ^{99m}Tc -DMS 腎イメージングの検討である。京大・川村の指摘のように、透析開始時の指標としての価値の検討がないので惜しまれるが、透析後で尿量 100ml/day 以下の例が極めて描出度の悪い像を呈する群に多いというのは興味ある事実である。さらに慈大・三木の指摘のように本法は、透析以外で腎不全を治しうる尿路閉塞例のスクリーニングに有用と思われる。

演題 247 は、京都市立病院・伊藤らによる嚢胞性腎疾患で、PHO/CON を中心とする総合イメージ診断の検討である。占拠性病変の広がり、腎実内での位置を知る上に PHO/CON は有用であるとのことであった。

全体的な印象としては、従来より、この分野での超音波診断の導入の少ないこと、むしろ核医学的には形態により多くの機能情報を加味した動態検査による検討が望まれる。

(石橋 晃)

O. 骨・関節

(248-252)

1971年、骨シンチグラム用放射性医薬品として ^{99m}Tc リン酸化合物が開発されてから骨疾患への利用は急速に

普及し、ルチン検査としての地位は確立されたが、異常集積部位の悪性良性の鑑別や、稀れに認める他臓器への集積等、今後の問題とすることも多々ある。